

■福島県の被災地を視察しました

12月12、13日の両日、福島第一原発事故の被災現場の視察と復旧・復興に取り組んでいる現地の方々との交流を目的に福島県の相双(相馬と双葉)地区の視察を行い、24名が参加しました。

以下、参加した福田博さんによる視察報告です。

12月12日は、アプリシエイト・フクシマ・ワーカーズ (AFW) の代表である吉川彰浩さんの案内で、いわき市を出発し、広野町、檜葉町、富岡町、浪江町を視察し、被災からの再生の現状を知ることが出来ました。(地図参照)

富岡駅跡

富岡駅前では、東日本大震災から3年9ヶ月経った今でも、時間が止まったかのように、津波で破壊された街が残され、放射線を測定するモニタリングポストの隣に立つ小さな慰霊碑と花束に強い衝撃を受けました。

「この店で食べた、遊んだ」と語る吉川さんの言葉の中に、東京電力で働き(現在は退職)、この地域で生きてきた若い人の「失われた故郷への熱い思い」と「新たな再生への決意」を感じることが出来ました。



富岡駅前の慰霊碑。廃墟となった駅舎とプラットフォームが背後に見える。

AFWとSVCF

12月12日の夜に、吉川さんとの交流会が開催され、見解の相違も含めて、さまざまな意見が出されました。しかし、福島原発構内で働く人々の労働環境と周辺地域で暮らす人々の生活環境の悪化を憂い、何としても改善しようというAFWの思いと活動は、原発事故収束のために、被曝の影響を強く受ける若い労働者に替わって自ら被曝労働を担おうとする原発行動隊員の思いと根底において共通していると私は思います。

この地域が「原子力廃炉産業の中心地域」とならないで、多様な職業選択が可能となる地域として再生する方向を模索する姿勢は、福島の再生を支援し、地方の自立的発展を目指す人々とも共有できるものだと思います。

この地域が「原子力廃炉産業の中心地域」とならないで、多様な職業選択が可能となる地域として再生する方向を模索する姿勢は、福島の再生を支援し、地方の自立的発展を目指す人々とも共有できるものだと思います。

ふくしま再生の会(飯館村)

12月13日は、未だ全村避難のままである飯館村の菅野宗夫さん宅を訪れてお話を伺い、またさまざまな実験の様子を視察しました。

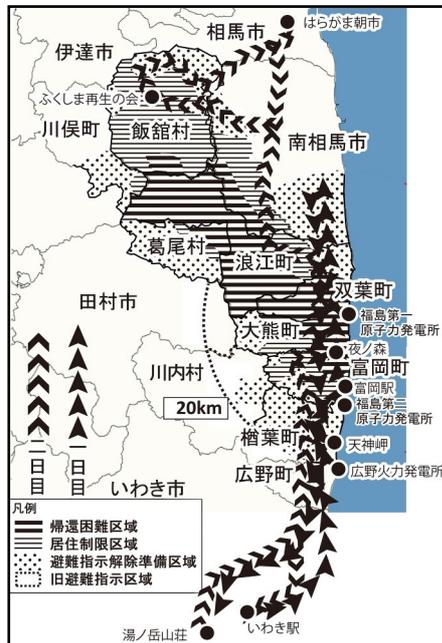
菅野さんのお宅は、福島の生活と産業の再生を目指す「ふくしま再生の会」の活動拠点となっており、種々の測定装置がネットワーク化され、村民や支援者がその情報を共有できる仕



独自に開発した大気捕集装置で大気中のチリの放射線を測定している。

組みが出来上がっています。ここでは、汚染の実態を正確に知るための「放射能の精密測定」、ふるさとの農地を取り戻すための「農地の除染実験」などの活動が、村民と全国のボランティアとの交流を楯子に実施されています。

ふくしま再生の会は「共感と協働」を合言葉に村民とボランティア、特に科学者・専門家の協力体制を築き、福島県内に3箇所、都内に事務局、東京大学農学部内に拠



視察の行程(官邸サイトの地図を元に作成)

点を持って活動し、全国・全世界に情報発信をしています。これらの実験によって、現在は放射線量がかなり低下したとのことで、農業や産業、健康・医療・ケアを再生させ、再び生活できる環境にするための壮大な実験に果敢に挑戦しています。

相馬はらがま朝市クラブ

午後は、はらがま朝市の報徳庵で昼食をとりながら、NPO法人「相馬はらがま朝市クラブ」理事長の高橋永真さんと交流しました。高橋さんは、朝市の開催で多くの人が集まり、風評被害を克服し、安全で美味しい魚を全国の食卓に届けて漁業の再生を目指していることを、明るく元気に話してくれました。

参加者の声

●現地を知ることが重要

福島第一原発周辺の相双地区の視察とあって、現状を九州の人々に伝える機会になればと思い参加しました。

視察第1日目。いわき市から浜通りを北上するバスの車窓からの光景は一見よくある過疎の田舎町に思えました。だが除染作業以外の人影がまったくなく、茫々とススキ野原に変容した田畑が続く光景は異様でした。

広野火力発電所の手前に広がる除染廃棄物の広大な仮置き場は、果てしない除染作業の現状を物語っていました。

空間放射線量が高いため津波被害を受けたままのJR富岡駅と小さな駅前商店街。道路一本で仕分けされた帰還困難区域と居住制限



広野町の広大な除染廃棄物仮置き場について説明する吉川彰浩氏。遠方に見えるのは広野火力発電所。天神岬にて。

区域が混在する富岡町をみると、原発災害の復興の難しさが偲ばれました。

2日目、飯館村での「ふくしま再生の会」の農業者と科学者が手を取り合って地域自立型の再生に取り組んでいる姿に、まだ道のりは遠くとも一条の希望の光を見たような気がしました。

原発事故被災地でお会いした方々がおっしゃった共通の言葉があります。それは「支援とか同情ではなくて、現地をみて欲しい。見に来て下さい」でした。

九州ではフクシマの復興は終わったと感じている人々が多くいます。原発に関する技術的なスキルは持ち合わせていませんが、現状を伝えていくことが私の使命だと思っています。（古賀暁 富岡市）

●継続的な被災地支援を

今回の現地視察の案内があった時、2つの想いで参加したい、と考えました。一つは「現地」を知ることでできる良い機会であること。二つ目は宿泊することで、行動隊の今後のあり方について十分な議論ができること。従って、これまでの自分の行動隊への関わり方を見直すことができるのではないかと考えたからです。

結論からいえば、二つの想いとも自分にとって明確になったということで、大変に意義ある2日間でした。企画いただいた杉山さんはじめ事務局の皆様には、改めて厚くお礼申し上げます。以下、感じたことについて、少し詳しく述べます。

今回の現地視察でお話を伺った吉川さんはじめ4人の方々からは、「原発被災地」とひとくくりにはとてもできない、それぞれ異なった立場からの生の声が聴け、改めて今回の災害（人災）の奥深さを知ることができました。正に「百聞は一見に如かず」であります。そして、今回の体験から、行動隊のあり方について疑問も持ちました。

設立当初の狙いは不可能になっており、これからは継続的な被災地支援（モニタリングを含め）こそが望まれています。従って、行動隊は、高齢者に限定した活動ではなく、幅広く一般の人でも参加していただける活動にすべき、と考えます。立上げ時の「暴発阻止」から「原発行動隊」に名前が変わったように、活動内容も含め、全体を整理して再出発することで、この先長く続くことになる支援が可能になる、と考えます。少し極論（暴論）になりますが、もしそのことで公益社団法人を外されることになっても仕方がないのでは、と思います。

今回、夫婦で参加させていただきましたが、女性の参加が少なくやや残念な気持ちでした。このことも、行動隊の活動を見直すべき、と考える理由の一つにもなっています。（西村正雄、美恵子）

●「分断」を乗り越えて「再生」を

一泊二日の合宿視察ツアーでした。いわき駅前での集合時間に間に合わず、置いてけぼりをくらった人もというアクシデントもあったけれど、結果としては有意義でとてもいい感じの視察ツアーだったのではないかと、思います。



宿泊した湯ノ岳山荘では自炊した。

幹事役の杉山さん、初日のガイド役をやってくださった吉川さん、2日目のガイド役のリリーさん、それと、シェフ三浦、食材担当渡辺さん他に感謝です。

「福島原発行動隊」という仰々しい名前のもとにどんな顔をした人がどう



「分断」の一例、富岡町夜ノ森。道路の右側は居住制限区域。除染廃棄物を収納した黒色のフレコンバックが並んでいた。道路の左側は帰還困難区域。各家の入り口や脇道はブロックされ、除染もされない。看板には「この先帰還困難区域につき通行止め」とある。両区域では補償額もまったく異なる。

いう思いで集まり、今回はどういふつもりでここに来たのか。行動隊をどんな行動隊にしていきたいのか、やることは何か。

北は盛岡、西は福岡から福島へやってきた21人（宿泊組）が吉川さんも交えて、けっこうホンネで話し合えたことが、僕にとっていちばん良かったと思えることです。

2日目の視察先2か所では、やっていることは違えども被災地の「再生」に向かう気高い話を聞けました。津波と原発事故で家や仕事を奪われただけではなく、もっと深い喪失と分断のなかで「でも、働くぞ」という人間のもっとも根源的なところから湧いてくる「再生」の話です。その途上にある話です。

一方で、補償金がたくさんもらえたことが被災地では自慢になるようなことが今日起きているというのです。「そんなことは変でしょう」と思える感覚を、実は被災地の人間ではない僕たちの回りの日常の中にどれだけ育んでいるのでしょうか。

「福島を忘れない」ということは、実は、分断されているのは被災者だけではなく、非被災者である僕たちの方でもある、ということに改めて確認し、僕たち自身の「再生」をやっていくことでもある。そう思わされた視察ツアーでした。

ところで、冒頭に書いた、初日置いてけぼりをくらった人は、僕です。（枚田繁）

■第38回院内集会を開催しました

11月28日（金）午前11時から参院議員会館102号室にて第38回院内集会を開催しました。今回のテーマは福島第一原発事故収束作業の現場の実態を知ること。そのための公式筋の情報源として、資源エネルギー庁・厚生労働省と東京電力の担当者をお呼びしてお話を聴きました。あらかじめ提出した質問事項に応じて7人が来場されました。

この総勢7人の担当者がかわるがわる報告したのは、廃炉作業の現況と問題点、人身災害の状況と保安対策、作業員の陣容、要員確保の対策と見通し、人材育成の現状等々。そのあとの質疑応答でも、テーマはほとんど作業員に関する諸問題に集中しました。

